



共古日録

十二

日本郵政省
河内縣
家持
照



特別
15
1413
14



門 5
號 1413
卷 14

神社
神道
古事記
神代卷
一

日録十二

神代卷一 一 班として記し多々忘漏あり
天照大神早忌服屋而令織神御起云々
記事いふに神御起と織りし屋の清賢にしてあらん
神代卷一 一 班として記し多々忘漏あり
天照大神早忌服屋而令織神御起云々
記事いふに神御起と織りし屋の清賢にしてあらん
神代卷一 一 班として記し多々忘漏あり
天照大神早忌服屋而令織神御起云々
記事いふに神御起と織りし屋の清賢にしてあらん



早稲田大学図書館
25.10.24
蔵 赤

どう好しん

古語拾遺 天津神籙及天津磐境を起し樹て
とあり神籙の榮樹をたてて其を神の御堂にして祭る事
の名より生諸木の意なり又天津磐境とは神を祭る
場所を石を以て築き周りに構へたるものなり其の考
考者史記の神籙石の事なり
其考に云く神籙石の事なり
神武天皇東征の時天津磐境に於て祈り玉ひ又
即位の四年に靈時流鳥見山中たすいひて皇祖を祭り玉
其後五百有餘年 崇神天皇の六年天照大神を大和宮に遷
遷りて祭る神籙を遷し玉ひて皇女也貴入姫命を以て
齋い玉ひしめ玉ひて神宮を皇居との別給り
即位神籙御劔を戴かして皇女についで玉ひて鏡劔を續け

言中に「神籙」の語あり 天皇又ひて天孫神を祭る
天社國社及神地神を遷りて祭る事なり
垂仁天皇の廿五年皇女倭姫命を以て天照大神を戴か
しめて御勢度會を以て祭る事なり 又天孫神を以て
今の内宮を以て祭る事なり 神籙の事なり 又天孫神を以て
十三年 雄略天皇の廿二年 伊勢の好言玉を以て倭姫命
の御子に教へ賜ひし皇大神我孫に在り玉ひて御籙を安
く御食さす丹波國與佐の小見比活の魚井原に座す道主
の子を以て皇女を齋奉り御籙都の神止由氣の大神を我
座す國へと欲すに誨へ賜ひし然らざるにあり
是より天孫神大和宮に遷り玉ひて祭る事なり 天社
國社を以て諸の神籙を以て祭る玉ひて天下を以て五穀豊饒

社考によりて見れば神祭は皇室のみにあらず諸國に天孫也
從の祭りなりと云ふは雄略天皇の御勢外宮を以て
給ひし時より元古其年欽明天皇の御年佛敎の傳
來神社を以て佛國と云ふは社考を以てし佛敎盛
國者の神社を廢す能はず其光體を薄ふべし正
解神皇の延喜式神名帳所載三千一百廿二座の神あり
元佛敎の來り以後元二千九百年の調査より國々に於て何れ
の月日神社の書ししを思ふに神皇の御年より廿二の御年
に於て神國の社を以て祭るにあり既に外社の神と
あり右清吉田從國北野等々云々が神皇御記にあり
一思ふに人口増加に比例して一家別より一社別祭るに
一村ありの必す其者の神社を以て祭るに思ふに如

て八の御年の御年より廿二の御年より一社別祭るにあり
甲乙より祭る神社甲乙より別にして也甲乙の同一神社を
以てて也甲乙に別りしを甲乙の同一神社を
乙の系譜にして祭るにあり一例を以て云ふ神皇御記に
白河郡大河内川中河内川等々の村あり祭る神社は白
河神社とし又大井川の村あり祭る神社は白河神社とし
又大井川の村あり祭る神社は白河神社とし其元必す
ありて其々に分社せしむ大井神社の神は白河神社の神
其元社を以て白河神社の神を以て白河神社の神あり
何れに白河神社の神を以て白河神社の神あり
と或は神社の分社あり白河神社の神あり
白河神社の神あり

武内武外神社中、神代より後々のありさまを
 参照するに、（一）明らなるありて、其次に修せり者、盛
 衰の節にして、甲申の盛衰を修めりて、乙未の無か如
 くの様なきにして、丙申の人事の興廢は神社の同歩みと爲
 りて、又乙未の盛衰を修めりて、丙申の同歩みと爲
 りて、此處の程度盛衰の同歩みと爲り、故に言ひ申すに、
 甲申の盛衰を修めりて、乙未の神聖の修めりて、
 の人心に修めりて、丙申の盛衰を修めりて、丁未の修めりて、
 此處の修めりて、乙未の盛衰を修めりて、丙申の同歩みと爲
 りて、利を修めりて、乙未の盛衰を修めりて、丙申の同歩みと爲
 りて、利を修めりて、乙未の盛衰を修めりて、丙申の同歩みと爲
 りて、利を修めりて、乙未の盛衰を修めりて、丙申の同歩みと爲

神社名流の別は神社史に於て大にあり、要するに、

一、神名に以てし、神名あり、
 二、事蹟に以てし、神名あり、
 三、地名に以てし、神名あり、
 四、部民の職業に以てし、神名あり、
 五、親屬の名に以てし、神名あり、
 六、人體の名に以てし、神名あり、
 七、歸化人の持物に以てし、神名あり、
 八、言語に以てし、神名あり、

伊弉册神、伊弉册神、伊弉册神、
 伊弉册神、伊弉册神、伊弉册神、
 伊弉册神、伊弉册神、伊弉册神、
 伊弉册神、伊弉册神、伊弉册神、
 伊弉册神、伊弉册神、伊弉册神、
 伊弉册神、伊弉册神、伊弉册神、
 伊弉册神、伊弉册神、伊弉册神、

以て修めりて、乙未の盛衰を修めりて、丙申の同歩みと爲
 りて、利を修めりて、乙未の盛衰を修めりて、丙申の同歩みと爲
 りて、利を修めりて、乙未の盛衰を修めりて、丙申の同歩みと爲

其の神祇を地理上に分別すべし

言座土神

交神 亦く祖神

地土神

赤

赤

赤

産土神 亦く其の中心に於て祭
政一般の爲に爲すに起り 祖神の中心に於て祭
又亦く其の中心に於て祭 藤原の春日神 亦く其の中心に於て祭
右の神 亦く其の中心に於て祭 梅原の春日神 亦く其の中心に於て祭
亦く其の中心に於て祭 今諸所に於て祭 亦く其の中心に於て祭

の祖神と云ふ義を之に同様に於て祭

地主神 在國の古有に於て祭 山領 山王 亦く其の中心に於て祭

領 亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭

亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭

亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭

亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭

亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭

亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭

亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭

亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭

亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭 亦く其の中心に於て祭

本社神心の主社にて祭神上位にあつたなり
 撰社本社の祭神に従彦彦命社を本社と大書する
 本社本社の祭神に従彦彦命社普通彦彦命の側面に長形
 小社にて棟木を一つにして神廊を別々にす此方に別々に
 小社を設けたるなり
 現今は左の別あり
 官幣大社
 官幣中社
 官幣小社
 國幣中社
 國幣小社
 別格官幣社
 官幣社は宮内省式部職より幣帛を授け
 國幣社は官幣社の次に在り内務省より幣
 幣帛を授けたるもの
 別格官幣社は官幣社と國幣社の間にあり
 國家に大功ありし人々を祭らるる社なり

縣下にありて其管轄に屬し其廳より祭事の幣

縣社 郷社 村社
 等外、道祖神、幸祓、塞神、石神、山神、水神
 地の神、痛為神等のり、弥々、以て社と云ふあり、石碑に
 神靈を刻するあり、其數計、多し
 此に注意すべし、或は神社に諸國に分布しあるに
 八幡社、祇園、痛為社等の如く、或は神に殊に尊信
 を致し、時代ありしを、昔田東佐父の説に諸國々府に
 八幡宮の創始ありしを、通考するに、大徳、平安朝の時代に
 て、寛平の頃より、鎌倉、室町、徳川、時代、に、
 多し、其神より、源氏、盛時、と、徳川、時代、に、多し、
 のより、其社殿、を、多し、なり

祇園神社は佛教の身以後牛筋又主と安んずりて
疫病の神にして諸國祭らるる也
神楽の行幸は魚夜に佛の信を流行病ある
神の神社に懸い祭典を為し疫神退散を祈り
祇園神社の多うは古時代よりあり
瑞荷社の多うは江戸時代よりあり
神を御饗祭あり書卷の跡を数珠の向文を祭神と
せりといふはあらず其意をばおとと瑞荷と記されおま
おまの多う者瑞荷といふは亦祭るに余際一巻の
昔の瑞荷贈り一位何瑞荷と許しりといふ
言代の迷信に神社を増加すに多うを
駿河甲斐両條の周圍の邊邊間神社の多う山岳敬崇

外より起しるか静岡市向御社の延喜年向火宮より
勸請せり傳ふに御社信仰時代が古くあり
也に祭るにありと思ふ
又等の也に方より御社を東海より西の方の御業
中江信仰の也
海上運送者の住み御社を信仰し船士の命を御社を信
分社勸請せりありといふあり
如くして其数の中江増かし来しを
神社建築は古邦より古上宗教工の性質を
合して古を見ざる火の標本あり
神社に神體なし神傍ありは佛教の感化を蒙りし
に神伴ありといふあり左社の神傍大和齋院御

其心は... 元来社... 古式に... 神... 神庫... 祭... 神名社名... 屋代... 祭者名... 鏡

神社何れも清潔を重じ職を忌む素を考へて佛者のご
色彩を重む

此の神社史研究尚し知らざる要なきを考へ

神道に關する心ひを多ぶるを左に記す

大和錦に於て序紅の色は瑞しけり

爲田春福の歌に「世の中は神の道と人の道と人

の道と」人の道は神の道は人の道なり

人の道は神の道なり神の道は人の道なり

天皇陛下は神なりと云ふにあらざるを重んず

神に勅諭は神の御言葉と云ふべきなり

教育勅諭は「其言を申さんてあり」也

神道の皇祖神を祀りて初しての歴代の皇方也

本居翁の言の如きは東洋の仁外に於けるの觀ありて
猶柔の仁外に於ける如く分らず仁外細末の如く古語の
主張する如く仁外に於て古語の研究の必要を主張
仁外か道は自らいひて云ふに非ずし作者に於て
道は仁外に於けるに非ずし禮樂なりし
細末に於て此の如く一字の如く此の如く
神の言ひは自らいひて云ふに非ずし作者に於て

神の言ひは自らいひて云ふに非ずし作者に於て
神の言ひは自らいひて云ふに非ずし作者に於て
神の言ひは自らいひて云ふに非ずし作者に於て
神の言ひは自らいひて云ふに非ずし作者に於て
神の言ひは自らいひて云ふに非ずし作者に於て

本居翁の言の如きは東洋の仁外に於けるの觀ありて
猶柔の仁外に於ける如く分らず仁外細末の如く古語の
主張する如く仁外に於て古語の研究の必要を主張
仁外か道は自らいひて云ふに非ずし作者に於て
道は仁外に於けるに非ずし禮樂なりし
細末に於て此の如く一字の如く此の如く
神の言ひは自らいひて云ふに非ずし作者に於て
神の言ひは自らいひて云ふに非ずし作者に於て
神の言ひは自らいひて云ふに非ずし作者に於て
神の言ひは自らいひて云ふに非ずし作者に於て
神の言ひは自らいひて云ふに非ずし作者に於て

玩具の心理的分類

玩具の心理的分類
心理の発達
1. 0-1歳
2. 1-2歳
3. 2-3歳
4. 3-4歳
5. 4-5歳
6. 5-6歳
7. 6-7歳
8. 7-8歳
9. 8-9歳
10. 9-10歳
11. 10-11歳
12. 11-12歳

感情 觸覚 視覚 聴覚 嗅覚 味覚

知覚 知覚 知覚 知覚 知覚 知覚

力 相 記 好 智
相 破 憶 奇 心
理 破 憶 奇 心

感情 同情 美情 注意

注意 射的の類

注意 射的の類

注意 射的の類

注意 射的の類

注意 射的の類

注意 射的の類

注意 射的の類

注意 射的の類

注意 射的の類

注意 射的の類

注意 射的の類

注意 射的の類

注意 射的の類

嬰兒後期

一年—三年

前期の終の物 玉子人形 老人形 (高きもの用カヤ) 魚い様 (布に綿をたれて製したるもの) 魚魚鯛等 (磁器又は紙) 鳥等 器械の鳥のり 器械體操 米拾子 枇杷等 天神様 遺囑等

幼兒期

三年—十年

動物及人物畫 動物標本 春駒 風船 風 繪本 張子の布 舟 (舟) 鏡 清木 木箱 木 けいじ (こしやこ) 器械の環 勉 (綱) 獨樂 龍吐水 眼鏡 (龍眼鏡) 車 (力車) 刀 (刀) 細五人形 か子だり 車道具

幼兒後期 七年—十年

谷本 147 宗教

竹とんぼ 豆鉄砲 空気銃 劍玉 器械の活動 動物 器械の活動 船車等 磁器の應用した玩具 手形 手形 輪 (砂目鏡) 繩 (磁器の用物) 繪合 飾繪 武器繪 人形 羽子板 千代紙

少年以前の玩具は運動具の選ぶべきものなり 此の頃の玩具は運動具の選ぶべきものなり 宗教は現在如何に成るべきか 宗教は現在如何に成るべきか 宗教は現在如何に成るべきか 宗教は現在如何に成るべきか

昭和十三年
全日本
全日本
全日本

昭和十三年三月
 全日本
 全日本
 全日本

昭和十三年	昭和十三年	昭和十三年	昭和十三年
三万七千三百八十八	二万七千九百九十九	三万七千九百九十九	三万七千九百九十九
七三三六	七三三六	七三三六	七三三六
七三三六	七三三六	七三三六	七三三六
七三三六	七三三六	七三三六	七三三六

昭和十三年三月
 全日本
 全日本
 全日本

神道
老翁の道
に同じく
を主張
及ぶるに
對する
者の説

神道の老翁の道は、
 天が下の道にはかたむけの
 道を、
 天が下の道にはかたむけの
 道を、
 天が下の道にはかたむけの
 道を、
 天が下の道にはかたむけの
 道を、

の破れに鳩(船)を... 我々の神道に能く...
いふは... 我々の神道に能く...
神道に能く... 我々の神道に能く...

わが神道... 神道に能く... 我々の神道に能く...
神道に能く... 我々の神道に能く...
神道に能く... 我々の神道に能く...

明治前記 第二冊... 神道に能く... 我々の神道に能く...
明治前記 第二冊... 神道に能く... 我々の神道に能く...

以下... 神道に能く... 我々の神道に能く...
以下... 神道に能く... 我々の神道に能く...
以下... 神道に能く... 我々の神道に能く...

日神 社
所用の鏡

駿河沼津所日吉山三の参拜行列に牧身の鏡一巻を物
行いしす二鏡は沼津城をわし火久保山若菜山若
が社殿を修繕せし時助宗作の鏡十巻を奉納せ
しは参拜の物也之月九日火久保山若菜山の沼津城を
しつ慶長年式なり

輪切の印と
日の丸

正一丹の少女女に印造すの事と云月を懸しし日向おと
の記されしものが教をあらが其如く日丸の形を用ひし
二巻の記を重なりなせりあつたをいひし
日丸の形につけた提灯をいひし
つたものたるをいひし
はあが輪切と妙なりとの事
の記輪切の事につけぬの事なづてと云う提灯其の印と
の事

柳田國芳の
記
二巻の丸に
印
切

日丸の丸に印造すの事と云月を懸しし日向おと
の記されしものが教をあらが其如く日丸の形を用ひし
二巻の記を重なりなせりあつたをいひし
日丸の形につけた提灯をいひし
つたものたるをいひし
はあが輪切と妙なりとの事
の記輪切の事につけぬの事なづてと云う提灯其の印と
の事

三ノハ、チカを食、川魚を食、チノ西國を食、チカカと云
膳阿、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
海、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
イ、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
即、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
ありて、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
白色出、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
チカあり、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
算、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
又、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
し、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
海、チカを食、チノ西國を食、チカカと云

話、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
年、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
チカあり、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
過、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
チカあり、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
藏、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
チカあり、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
越、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
チカあり、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
社、チカを食、チノ西國を食、チカカと云
今日、チカを食、チノ西國を食、チカカと云

書に於て其の事をも詳らかにして後に道服とて今の羽織と云ふの
 日本所創起原亦阿蘭風の古蓮衣に縫造り後之旁命と云はれ
 手推車に改号され素襦袢と改稱す應永三年而して應永三年の
 約す此の仁者又の名に於て許理を而して此の
 如阿蘭とは應永五年に名を改めたりと云はれ
 禮而の起原日者紀應永天皇五年下、以禮而献于天皇とあり
 屬蘇而の起原日者最時に天照天皇の弘仁年中に於て
 砂糖の起原日者東大寺大佛供養に知して勸農局
 に於て南島介に於て東大寺に造らるる御糖は天平勝宝の
 頃の秋物帳に蔗糖二斤とあり三分とありと見たり
 白砂糖の始文正年中に於てと云はれ一説に見たり
 菓子を製造の始製餅然餅あり雁の如く菓子と云はれ

昔古好、善、ふの事、人、の事、の事、の事、の事、の事、の事、の事、
 古中好、善、ふの事、人、の事、の事、の事、の事、の事、の事、の事、
 例あり、善、ふの事、人、の事、の事、の事、の事、の事、の事、の事、
 善、ふの事、人、の事、の事、の事、の事、の事、の事、の事、の事、
 漢、書、傳、來、の、起、原、唐、書、大、食、小、食、和、名、書、海、味、方、
 干、菜、の、起、原、唐、書、大、食、小、食、和、名、書、海、味、方、
 干、菜、の、起、原、唐、書、大、食、小、食、和、名、書、海、味、方、
 宋、書、の、起、原、山、崎、善、成、文、教、通、古、の、程、朱、の、學、世、に、行、
 名、を、正、性、高、見、す、と、善、ふ、の、事、の、起、原、唐、書、大、食、小、食、和、名、書、海、味、方、
 如、く、は、善、ふ、の、事、の、起、原、唐、書、大、食、小、食、和、名、書、海、味、方、
 洋、書、の、起、原、寛、永、中、新、井、白、白、の、米、變、新、書、の、善、ふ、の、事、の、起、原、
 菓、子、の、起、原、物、回、轉、其、の、起、原、唐、書、大、食、小、食、和、名、書、海、味、方、

相つた高きと高き譯成せしむる中 此の如くしてしるす

洋算教科の始 文久三年二月教書局の置る中 此の如くしてしるす

其の教書局の置る 文久三年二月教書局の置る中 此の如くしてしるす

和算の創始 日本記に天武天皇十年三月の下の命 磯部連

石積等撰 算學傳授新法一部 四十四卷

并假名の起原 假名はカリナとつていふとあれは片假名の起原

其の起原 假名はカリナとつていふとあれは片假名の起原

平假名の起原 假名はカリナとつていふとあれは片假名の起原

和算の起原 假名はカリナとつていふとあれは片假名の起原

和算の起原 假名はカリナとつていふとあれは片假名の起原

和算の起原

和算の起原 假名はカリナとつていふとあれは片假名の起原

和算の起原

和算の起原 假名はカリナとつていふとあれは片假名の起原

和算の起原

和算の起原 假名はカリナとつていふとあれは片假名の起原

和算の起原

和算の起原 假名はカリナとつていふとあれは片假名の起原

和算の起原

和算の起原 假名はカリナとつていふとあれは片假名の起原

和算の起原

和算の起原 假名はカリナとつていふとあれは片假名の起原

和算の起原

和算の起原 假名はカリナとつていふとあれは片假名の起原

和算の起原

和算の起原 假名はカリナとつていふとあれは片假名の起原

和算の起原

和算の起原 假名はカリナとつていふとあれは片假名の起原

和算の起原

和算の起原 假名はカリナとつていふとあれは片假名の起原

後、飯久文の用い居る行方なり
 平維章著南歌書中、三世俗通用の書、一年段
 啓三行、二く、三應長元和の頃、四見當り傳るが、五寛永の頃、六
 始りし、七や、八と、九と、十なり

樂の種目、一平坊清和、二雅父、三美言、四樂、五史に

長、一漢、二漢、三漢、四漢、五漢、六漢、七漢、八漢、九漢、十漢

還、一成、二成、三成、四成、五成、六成、七成、八成、九成、十成

等、一唐、二唐、三唐、四唐、五唐、六唐、七唐、八唐、九唐、十唐

新、一鳥、二鳥、三鳥、四鳥、五鳥、六鳥、七鳥、八鳥、九鳥、十鳥

蘇、一志、二志、三志、四志、五志、六志、七志、八志、九志、十志

北、一庭、二庭、三庭、四庭、五庭、六庭、七庭、八庭、九庭、十庭

神樂舞の起原、一和事始に、二正統記を、三り、四天石宮に、五り、六いし

と、一又、二和、三和、四和、五和、六和、七和、八和、九和、十和
一は、二和、三和、四和、五和、六和、七和、八和、九和、十和
一は、二和、三和、四和、五和、六和、七和、八和、九和、十和
一は、二和、三和、四和、五和、六和、七和、八和、九和、十和

伎樂舞の起原、一名、二名、三名、四名、五名、六名、七名、八名、九名、十名
一は、二名、三名、四名、五名、六名、七名、八名、九名、十名
一は、二名、三名、四名、五名、六名、七名、八名、九名、十名
一は、二名、三名、四名、五名、六名、七名、八名、九名、十名

申樂の起原、一和事始、二和事始、三和事始、四和事始、五和事始、六和事始、七和事始、八和事始、九和事始、十和事始

和樂の起原、一和事始、二和事始、三和事始、四和事始、五和事始、六和事始、七和事始、八和事始、九和事始、十和事始

和樂の起原、一和事始、二和事始、三和事始、四和事始、五和事始、六和事始、七和事始、八和事始、九和事始、十和事始

和樂の起原、一和事始、二和事始、三和事始、四和事始、五和事始、六和事始、七和事始、八和事始、九和事始、十和事始

和樂の起原、一和事始、二和事始、三和事始、四和事始、五和事始、六和事始、七和事始、八和事始、九和事始、十和事始

和樂の起原、一和事始、二和事始、三和事始、四和事始、五和事始、六和事始、七和事始、八和事始、九和事始、十和事始

爲る、起原、其事、南浦、知、火、
二、の、中、の、海、軍、に、云、後、大、子、に、銃、砲、の、所、以、を、尋、ぬ、
に、過、し、文、を、身、而、の、新、南、軍、に、り、中、の、之、を、以、て、銃、砲、の、
の、み、り、て、技、術、妙、方、を、得、つ、た、に、延、に、行、兵、を、を、中、の、流、祖、傳、に、
向、内、の、田、本、元、宗、を、三、年、六、月、南、軍、に、赴、て、砲、術、の、秘、傳、を、
得、た、と、云、ふ、也、云、云、田、本、元、宗、と、云、ふ、也、
火、砲、の、來、の、起、原、大、友、記、天、正、十、年、の、夏、南、軍、に、り、兵、士、を、
う、し、肥、後、に、來、り、り、り、宗、麟、之、を、獲、て、大、に、悦、び、身、後、の、將、の、
莊、州、生、の、島、に、遷、徙、を、り、て、國、崩、と、云、ふ、也、
砲、術、の、來、の、起、原、日、本、無、若、の、草、紙、に、云、後、天、明、天、正、の、時、に、南、軍、
身、後、に、り、北、條、三、房、會、を、り、和、蘭、の、教、士、及、火、砲、火、砲、の、用、法、を、
向、て、且、傳、し、且、圖、其、解、の、秘、傳、を、以、て、形、を、擬、して、之、を、
秋、の、時、に、就、て、兵、士、を、以、て、習、せ、り、と、云、ふ、也、仁、孝、天、正、の、時、に、長、

崎、平、長、高、の、時、に、大、に、蘭、人、に、滿、會、を、り、り、に、身、後、に、過、し、由、途、
火、砲、城、を、二、高、仰、と、云、ふ、也、田、本、元、宗、の、時、に、南、軍、の、主、を、南、
軍、に、滿、會、す、後、に、高、島、の、時、に、大、に、南、軍、に、り、之、を、
之、に、傳、し、其、法、を、傳、せ、り、と、云、ふ、也、田、本、元、宗、の、時、に、南、軍、の、
身、後、に、り、其、法、を、傳、せ、り、と、云、ふ、也、南、軍、の、時、に、南、軍、の、
賜、に、傳、せ、り、と、云、ふ、也、田、本、元、宗、の、時、に、南、軍、の、
い、然、も、之、が、今、を、云、下、に、傳、え、り、と、云、ふ、也、
砲、術、の、來、の、起、原、大、友、記、天、正、十、年、の、夏、南、軍、に、り、兵、士、を、
力、を、強、め、り、と、云、ふ、也、田、本、元、宗、の、時、に、南、軍、に、り、大、に、南、軍、に、
せ、り、と、云、ふ、也、後、長、崎、の、時、に、甲、比、丹、派、武、士、を、若、手、其、術、
の、秘、傳、を、傳、せ、り、と、云、ふ、也、
火、船、の、創、造、日、本、紀、應、神、天、皇、五、年、冬、十、月、神、何、皇、國、令、造、船

長門守船既成之試以千由一俚輕泛疾行如馳故為其船名
栢野とあり或曰信英の弟盧澤年二七船本は後日盧澤
魯澤の姉の姉と云ふ作し

蒸氣船の購求 明治二年六月和蘭より軍艦觀光號を購求した
兵田坊景茂が船長として長崎へ運ばれた船名は「海防」

馬車の創造 明治二年東京の友人の紹介で馬車を造る
人力車の創造の法を山崎本銀所の手書から元始の山中本銀に
發明したと云ふ事を知りて

寫字術の發明 明治二年に始りて、此の書が為に併にガキルに
して千八百九十三年に發明せられた

印形の創造 明治二年書寫の書より 格式に符號を定むる九月
朔而平仲祿官奏上神寶書曰卷鑰九箇本印一箇圖と云ふ

見え又續日記に文武天皇萬元年夏四月鏡司より
印を鑄りて用ふとあり

聖代に印を用ふ年代及大押
造りて造りし一々此印を用ふるといふ事にして後きざし 大押は
造りしよりありしと云ふ事 古くは造りしよりありしと云ふ事

かゝる年々を造りてあり 後には大押と云ふ
諸君の創造 文藝書古に造りて後きざし 文藝書高
の造りもありしと云ふ事 後には大押と云ふ

碑の創造 工部省志願より 造りて後きざし 大押と云ふ
子者帝武烈の起る年より天皇極權の事と云ふ 為に造りて後きざし

造りて後きざし 大押と云ふ
大橋の創造 仁徳天皇萬年三月為造りて後きざし 大押と云ふ
造りて後きざし 大押と云ふ

造りて後きざし 大押と云ふ
造りて後きざし 大押と云ふ
造りて後きざし 大押と云ふ

造りて後きざし 大押と云ふ
造りて後きざし 大押と云ふ
造りて後きざし 大押と云ふ

古尺ありしに七寸増造し以て和尺と定むるに言伝年申す
又四寸尺申古尺工又四寸申す者多く木匠類尺を造り世に用ひ
と稱すこの其度量よりいへば

折表尺 測量家 伊能 勘解由 言伝尺とて又四寸尺とて折表して此尺を
造り以て度量に用ふ

源尺 此端通堂尺 辨考より高倉藤公自古唐尺服以至今調進
主二御交者即此尺也以其用由辨考造故又名源尺と云

吳服尺 古吳服尺 蘇尺 同一種にして尺二寸五分の度量なり申す尺
二寸の度七寸服尺と云

念佛尺 謂て世に河内山より念佛塔等七點出せし其塔等尺度
七寸刻す乃ち七寸増し以て念佛尺と名く此塔等尺に密合すといふ
量也尺古尺合の尺とて或量也尺と稱す大言令度也尺とて用ひ
ぬる



三種尺 馬蹄寺尺 慧日寺錫鏡尺 敵山尺 東寺金蓮院尺 梅尾尺

泉涌寺尺 大寺寺尺 法善寺尺 生駒長福寺尺 御前尺 鷹尾尺

又平尺 紅紙尺 緑染尺 等尺

(言傳尺以下大言令等尺並尺等尺)
(度量衡之類に依りて)

曲尺 蘇尺の制定 明治七年四月折表尺とて以て曲尺とて其一
尺二寸五分と蘇尺と云 此為尺指の尺一切停廢し於九年二月

度量衡を制定せり

量の創始 顯宗天皇二年歲次己亥 蘇福一斛を銀錢三文に代むと
稱す此の尺を度量衡考考す言伝に云く用ひし古尺に見ゆれば

此の言伝より四代の考據なきをいふ 詞也やと云ふ
量の制定 文武天皇元年令を制定し度量衡を制定す

古斛の令せに云 又「横本を傳りしに七寸六分

及部者厨升 山科体 法隆寺大斗 法隆寺銅斗 東寺
考供体 東大寺十合升 東大寺張懸升 東寺川上体 東寺
二月堂十合升 東大寺升 東大寺長著升 福荷御出講升
鐵体 花園升 興福寺南園堂由升 興福寺布施升
興福寺東金堂升 藥師寺金堂升 長合升 新美所升
春日月代末納升 何智大寺云升 何智大寺云供用升 并小升
何智大寺云里升 并小升 何智大寺云利升 并小升 山科升
何智大寺云麻加利麻知升 春日社供升 藥師寺段段升 甲州
大升 甲州セシ升 甲州カラセシ升 甲州ハカラセシ升 房根升
武佐升 近江升 西井成古升 大陽卷升 何智大寺升 三嶋升
長講升 銅升 榛原升 日野升 福高升 似尾升 鼠喰升
東大寺天啓升 三川屋成也升 内侍所升 難波成古升 言
三院也升 上玉三院觀音講升 春日陣ノ直來升 伏見升

元明升 又正新制升

其古より元明用銀升、登曹興銀所國海馬の延曆升あり又何智藤
堂升あり甲州升あり外にあり

古料 等法重云向 日多在如の古料、唐制と兼けて内方五寸深二寸
其ノ厚の大又量如にして官務ニ用之也一升、高以唐之二升半に
當りたる唐一升の積ニ高升寸也是れ向より一斗に在如升の積
にす。周輔と向いにす。古法に依りては、
京料の如算も重云向に云今向りの料、古料の方寸に二分を減して
向に云と深さ向に二分を加へたりと云。其積も向に二分を減して
七割の江戸料とす。後には又京料とも云ふ。元和年中より行ふに先
利重能歸強懸懸に云えりし。
權衡の創始 昔升天皇の御宇に毛野久比吳國より傳來す所の吳
權衡也。
權衡の制宗 文武天皇天皇元年令七制し度量衡を定む。制量衡
に云古衡の右銖兩斤鈞石の計あり是れ五權と云ふ是れ

曆修正大春日と傳好麻呂のまじりこころに於りしなり五紀とは歳日月
星辰の五数也

宣明曆 清和天皇貞觀三年夏六月恭曆を廢し宣明曆を以

て行ふを以る於三年の事なり宣明曆は唐穆宗長慶二年改易

の曆にして貞觀元年勅由大伴山名に傳へて置るなり

貞享曆 靈元天皇貞享二年陽明詔出徳泰福保并春由と爲り

新曆を奉る名を貞享甲子曆と賜ひ行ふなり二十九年の事なり

寶曆甲戌元曆 北園天皇宝曆四年十月陽明詔出徳泰知御初

て之を以て新曆と爲り奉る名を宝曆甲戌元曆と賜ひ行ふこと十

四年の事なり寶政曆 光始天皇寶政九年十月安徳公謀逆御初を承りて新

曆を授け奉る名を寶政曆と賜ひ行ふこと四年なり寶政曆は

清和曆を改め奉りて崇禎曆と爲りて作らざるなり

天保曆 仁孝天皇天保三年安徳時親御初を承りて新曆を授け奉

る名を天保元曆と爲りて行ふこと三年なり

大陽曆 明治五年十一月大陽曆を廢し大陽曆を以て宣統三

年の三月三日を以て明治六年一月一日と爲りて元たり

祝日の制定 明治六年一月より五等を廢し祝日を定め奉る

以ては旧暦古勅を以て抄写したる大陽曆を以てし奉るなり

正倉院三倉の
里後修の
事ありし

里後修の正倉院三倉の事ありしを以て正倉院の事ありし

天保元年八月三月の事ありしを以て天保元年の事ありし

示すは同年十月の御物出納帳に御物を出したる事ありし

事ありしを以て天保元年の六月より十月迄の間に出来

せしもの事ありしを以て天保元年の六月より十月迄の間に出来

天保年間に正倉院と爲りて見ると同時に勅御令との事あり

馬琴が手記に
日本外史

あるを名。又等に正藏と云ふ名は十年に見ゆ。中倉の文
 文正堂文(有)年所蔵に見えたり。ありあふふの心正
 藏院と云ふ初刻倉の文ありしと云ふ。正倉院三倉蔵
 瑞也遺一匹の記をみて日録卷三に記し。多しを記し
 讃岐の人黒木鋤堂は馬琴が言せし日本外史を所携さ
 る。其書「ふゆの家老本村黒老の書に應し馬琴が
 贈し。欄かに日外史と上巻に刻し下部に曲亭文庫
 と刻し。板は用紙を作つてあり。其書は曲亭文庫
 といふと云へり。馬琴が著せし後世書とあり。曲亭
 文庫といふは馬琴の敬服の字をいひしとあり。その書
 等々文物本と云ふ。其書は馬琴の遺文見ゆ。その書

米國の福の神
ビリケン

其玩具米國の福神ビリケンと云ふ。其方東京に模形
 を造り。又は寫す。画をいして
 畫り。其書にありし
 此画を初しと初し
 見たし。西三年
 の年賀状に安田
 善之助がはか。其書籍の表紙様
 印刷して表紙の如き様。左の如き。画がれ贈り。其書籍の表紙



其の面をいふ。その書にあり。安田善之助が此福神を
 贈り。其書籍の表紙に
 後にもありし
 其書にありし
 其書にありし

の若るるんかえいは何にかよるよめんと想い付たんと其
りてはせぬやうのせもあらず此の日本及日本人を清に玩弄の火統
領と見せしめたるものなり此の事ありしをいふに
君は

ルノルトが火統領になつたぬにデグーバーヤ(小態)と云
て大聖に書かれたりて見えてデグーバーヤ(ちさきベリ)が出来た
のであるをいふセカド(ルビの名)セカドに呼んでデグーバーヤといひ
ア(父の名)はデグーバーヤと云ふからのことなり二人をいふは
た思ひであらぬに米國でも火統領を玩弄に扱えたのはルビを以て
元祖とす。だが我國では元祖の方を何と云ふ事に二月の
方より呼ばれて居る。

ふんを呼ぶもの我々の國画の如く教をいふ人か
あやうしと思ふ米を思ふの事には石井光背をいふ事
遊せしめしもの思ふは福島の要形と云ふことなり

此書新説
勇に必要なり
日本歴史の二冊
書出は其の
世に出る其の
及後々不信
此書

新説研究の整理したるものなり又材料の事
後白河院の集のりし日本歴史抄二巻を白が
ふが文行をまづ購はれたるものなり
のり及日本人に委ねる事の事なり
いふ事なり信せしめし書るに山田河原の
物考に今ある日本歴史抄今は純て偽りなり
おの見ず新編をいふ今は偽りなり
の事考が其の事なり越後高野の
りしもの事なり
すしりなり
當世の事なり
の信すべし理由は新説加す取柄に用張る當りなり

これ等のまゝをきかつては、
此の末更には、
太子の身なり、
體は、
しつゝ、
よららの仲の、
に、
は、
仲の若は、
こぼら、
磨めて、
は、

也の涼し、
唯、
水、
一、
つ、
寂、
和、
於、
件、
あ、
か、
あ、
い、

それらと和讃とをいふはあつておぼつかうとて教義の中に入った
去る歌をたのむ歌林である多 かたはら 歌林を行はんと かたはら 歌林に
ふえと かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
近江の湖はうみなるうみを葉師の也を かたはら 歌林に かたはら 歌林に
加正の歌は かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
むをのうみの句を かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
心算に起る かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
筆の かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
海には かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
海には かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
彼の かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に

千年の かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
家 かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
昔 かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
け かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
愛 かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
わ かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
情 かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
わ かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
め かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
は かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
び かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
未 かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に
前 かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に かたはら 歌林に

甲斐の風しるるから出で信濃の女と云ふたれと
のこしにあらぬと云ふげもかはるでかれと云ふ
ゆれと云ふと云ふかゝるの事をも存にせられたり

船はみよにも思し 船は舟は短れども 船白く船の首は短しと
つらむのか 船の定むは長しと云ふ事
羽うちものやうかは 船は舟は短れども 船白く船の首は短しと
かきせに生れては 船は舟は短れども 船白く船の首は短しと

舞へてあつたつづき 舞は舟は短れども 船白く船の首は短しと
舞へてあつたつづき 舞は舟は短れども 船白く船の首は短しと
舞へてあつたつづき 舞は舟は短れども 船白く船の首は短しと

船身はのほやあうらうらもの他ひのほは短れども 船白く船の首は短しと

みよの海なるかい程は さらな程れと云ふ 舟は舟は短れども 船白く船の首は短しと
船の山なる 船は舟は短れども 船白く船の首は短しと
船の波下流の程のたがひと云ふ

あそいせせと云ふ 舟は舟は短れども 船白く船の首は短しと
あそいせせと云ふ 舟は舟は短れども 船白く船の首は短しと

女は望りたるは 高き歳二十三回と云ふ 三あせにしと云ふ

船の文なる 船の舟は短れども 船白く船の首は短しと
船の舟は短れども 船白く船の首は短しと
船の舟は短れども 船白く船の首は短しと
船の舟は短れども 船白く船の首は短しと

後世の盛衰なりたるの中に交りたるに思ふ

由りてわかれし歌枕にせいの地原さくを強きしもの中
の夜はひびいて来て、数うてばみへる雲千鳥をならしてうらみ

おのころの歌
おのころの歌

春の日の影さくらさくさく西の空に
三年歳にたのむは

おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、

まじりて
まじりて、おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、
はなはたしく、おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、

よく、おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、
とや、おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、
おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、
おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、

おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、

おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、

おのころの歌
おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、

おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、

おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、

おのころの歌
おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、

おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、

おのころの歌
おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、

おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、

おのころの歌
おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、

おのころの歌にまじりて、まゝの氷と結ぶ間に、扇のひきかき、

國の政も多岐なりかふ詞は優り伊豫の如くに成つたものなり
ひじりせたりしはや、加賀をまわしはや、物縁をたしはや、
好料のありてかたはれせん

大洗紫のりんたるや、厚まのわね、白ちとふかぬ、あんななるは、
とく、それれなせ、つり、た、あまのたまつばや、うらな、
ま、二載もかゝつたや、

それか、考、船、(多)道、鴨川、みのさ、みじら也、みじら、坂、は、た、い
たし、の、夜、也、二、の、山、川、さ、く、岩、堤、
考、船、宿、の、道、ぬ、也、二、の、や、

也、は、に、か、か、し、る、船、堤、お、い、を、ら、さ、か、ま、う、野、み、せ、の、也、あ、ら
の、ま、し、つ、か、こ、野、よ、ご、の、湖、の、しか、の、う、ち、に、し、ら、ま、が、建、て、た、じ、持、佛、堂、
の、か、ぬ、の、柱、

これ、い、う、ひ、む、が、一、は、何、の、や、向、山、向、考、お、津、つ、濃、み、お、の、ら、
い、ま、お、ら、い、し、た、の、霧、津、右、山、こ、う、ぶ、ん、や、新、多、の、橋、せ、の、北、原、の、生、跡、
二、首、跡、た、也、は、名、跡、跡、也、也、二、の、茶、の、先、跡、也、あ、ら、の、

これ、い、う、北、は、は、越、の、國、夏、冬、と、な、る、雪、を、み、駿、河、の、國、な、り、
考、ま、の、る、ね、に、こ、る、夜、盡、と、な、り、燈、た、り、
考、ま、の、る、の、帝、大、して、病、た、事、か、た、り、

春、の、夜、神、の、葉、を、摘、め、は、名、を、に、船、こ、か、は、し、な、れ、た、こ、人、
神、の、葉、を、摘、め、は、名、を、に、船、こ、か、は、し、な、れ、た、こ、人、
と、も、葉、を、摘、め、は、名、を、に、船、こ、か、は、し、な、れ、た、こ、人、

此、の、葉、に、聖、お、は、す、又、度、は、こ、も、ぐ、に、な、り、を、み、別、ま、す、や、
又、は、聖、女、が、聖、や、は、い、ら、か、い、春、
又、は、聖、女、が、聖、や、は、い、ら、か、い、春、

大、慈、悲、の、道、を、な、れ、ば、伊、勢、路、の、こ、ん、れ、也、し、つ、づ、れ、盡、し、度、
能、く、(多)ら、む、と、思、ふ、徒、歩、し、る、は、過、さ、し、す、づ、れ、と、山、
こ、い、し、馬、に、よ、れ、ば、若、行、な、う、ず、そ、う、も、は、る、も、は、ぬ、野、に、

美、王、子、
無、常、(多)る、に、は、河、か、若、し、る、行、行、若、よ、や、す、妙、姫、の、葉、也、重、徳、
然、解、の、橋、現、は、名、の、葉、こ、を、か、り、給、
せば、年、は、行、け、ど、し、美、王、子、
美、の、浦、に、し、き、り、ま、

美の都をめぐりて、くわんぐわんぐは、おぼろけか、からの横現

の覚せよ、玉の蓮のまなこを、あざやかに、

我身が修行に出せしめ、すまのみまかを、おろまきり、あせぐり、

あせぐりて、獨り越橋のたに、あぢて、あしうちせしこそあまれ

冬は山伏修行せし、はりしたのし、木葉も紅葉して、散

りすて、て、さびしく、思ひし、初霜雪みつみて、

君が愛せし、あまの、あぢにけり、川中に、をれを、水が

あはれ、いねとは、あぢにけり、あぢにけり、さし、

かりけり、里の人から、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

月影のあし、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

今橋の中、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、あぢにけり、

後物に... 昨日見え... 今日暮つては... 徒然かに...

東... 水... 別れ... 大和... 三輪... 山... 秋...

東... 夢... 凡... 夢... 山... 人... 名... 名... 名...

お... かな... 馬... たに... 崎... 山... 人... 二... 名... 名... 名...

お... かな... 馬... たに... 崎... 山... 人... 二... 名... 名... 名...

お... かな... 馬... たに... 崎... 山... 人... 二... 名... 名... 名...

お... かな... 馬... たに... 崎... 山... 人... 二... 名... 名... 名...

お... かな... 馬... たに... 崎... 山... 人... 二... 名... 名... 名...

お... かな... 馬... たに... 崎... 山... 人... 二... 名... 名... 名...

お... かな... 馬... たに... 崎... 山... 人... 二... 名... 名... 名...

お... かな... 馬... たに... 崎... 山... 人... 二... 名... 名... 名...

お... かな... 馬... たに... 崎... 山... 人... 二... 名... 名... 名...

お... かな... 馬... たに... 崎... 山... 人... 二... 名... 名... 名...

お... かな... 馬... たに... 崎... 山... 人... 二... 名... 名... 名...

お... かな... 馬... たに... 崎... 山... 人... 二... 名... 名... 名...

お... かな... 馬... たに... 崎... 山... 人... 二... 名... 名... 名...

古歌謡研究必読
書目録
及
其
の
本
文
の
注
記

世に於ては、古歌謡の遺蹟をたづねて、今も残存するものも、
一掃して、物書きに委しく、遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、必読書、この世に於ては、古歌謡の遺蹟をたづねて、

果ては、古歌謡の遺蹟をたづねて、古歌謡の遺蹟をたづねて、

小仲村博士の古歌謡研究、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

大和道樹の古歌謡研究、古歌謡の遺蹟をたづねて、

又神樂馬楽、古歌謡の遺蹟をたづねて、

部、古歌謡の遺蹟をたづねて、

上代歌謡の遺蹟をたづねて、

歌人も、古歌謡の遺蹟をたづねて、

歌謡の遺蹟をたづねて、

の初め、古歌謡の遺蹟をたづねて、

神樂馬楽、古歌謡の遺蹟をたづねて、

調、古歌謡の遺蹟をたづねて、

流、古歌謡の遺蹟をたづねて、

結果、古歌謡の遺蹟をたづねて、

又種々の古歌謡が行はれて、古歌謡の遺蹟をたづねて、

歌謡の遺蹟をたづねて、

雑、古歌謡の遺蹟をたづねて、

心算、古歌謡の遺蹟をたづねて、

今、古歌謡の遺蹟をたづねて、

神、古歌謡の遺蹟をたづねて、

系、古歌謡の遺蹟をたづねて、

統、古歌謡の遺蹟をたづねて、

分、古歌謡の遺蹟をたづねて、

系、古歌謡の遺蹟をたづねて、

統、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

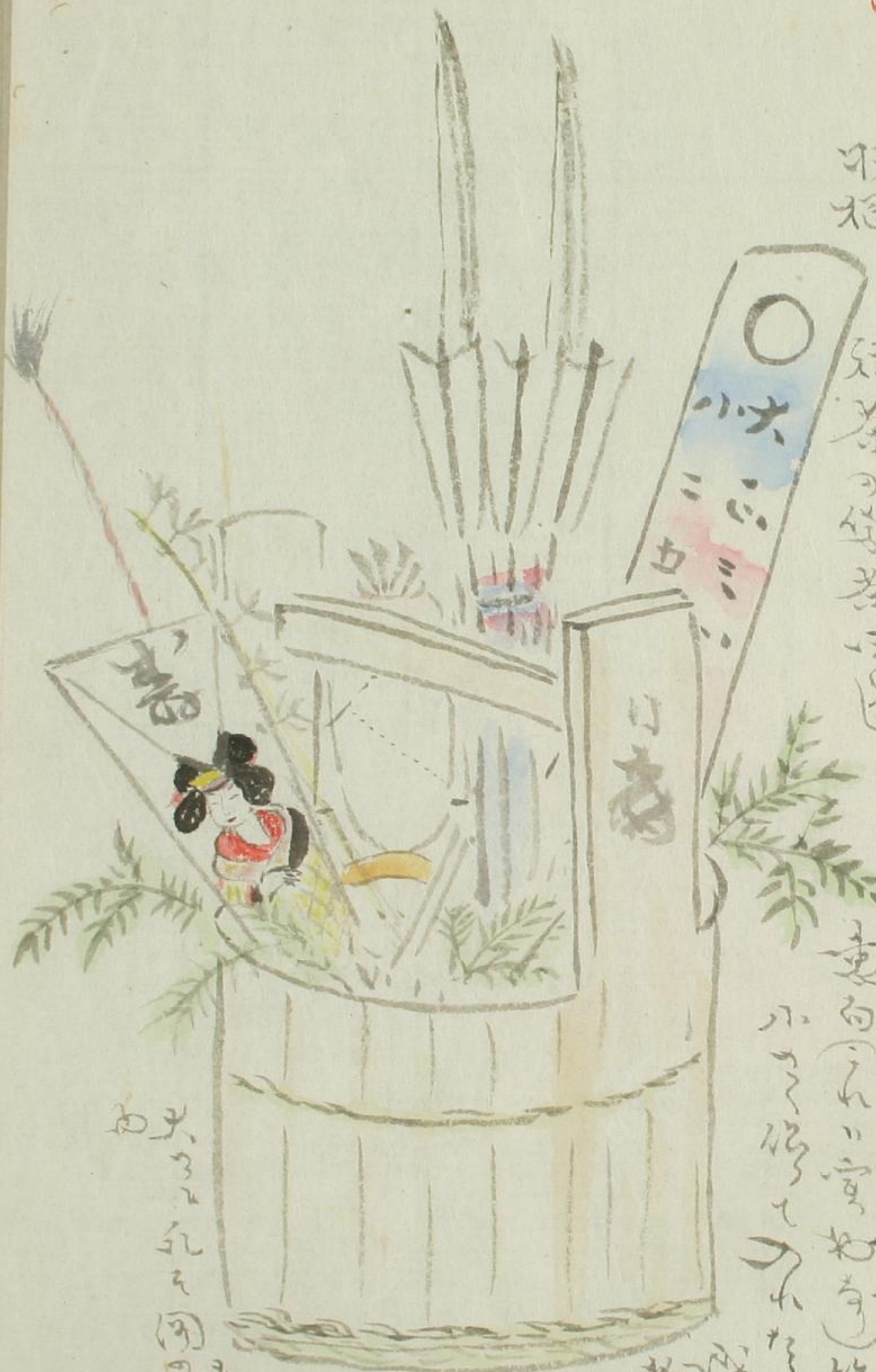
古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

古歌謡研究必読、古歌謡の遺蹟をたづねて、

歳の神の御如
玩具團



歳としの神かみの御ご如ごとく
玩具あそび團だん
大工おおいの御ご如ごとく
玩具あそび團だん

大工おおいの御ご如ごとく
玩具あそび團だん
大工おおいの御ご如ごとく
玩具あそび團だん

つと近世の理路の類とみるに多つたものありき
日者社七社祭禮形一書比較の事書院蔵書と今時東京
之神大書院研究室の所蔵にも
書かぬ神代文の比と
聖眞社
客人社
十神神社
三宮の七社
三井の
伊南志乃
己本當土理可先
如禮
平止良志能
馬
如禮
平止良志能
馬

文久三年の徳政
及今の徳政
其節の考

浪義が... 文久三年に... 大田が加判に... 西井再初... 福前社... 徳政... 其節の考... 浪義が... 文久三年に... 大田が加判に... 西井再初... 福前社... 徳政... 其節の考... 浪義が... 文久三年に... 大田が加判に... 西井再初... 福前社... 徳政... 其節の考...

文久三年の徳政
及今の徳政
其節の考

如河... 其節の考... 花野... 樹木... 其節の考... 如河... 其節の考... 花野... 樹木... 其節の考... 如河... 其節の考... 花野... 樹木... 其節の考...

わん何れの家の人々を将せ物て互御くせ見て始前方るも
えんがに用意しめんかおつて勝つ能はずかと引退き難せぬ
われしより吾御もあらず将格等々もあらずとて
精練もせよ及務せなうに三ツ尻ありとて子バタカとていさ
ふ所好つ剛を紅白の細き二層よりおのこまに
とて細き棒につけこんで用ひてそとに赤い練を
其まきあやうさうゆとまきまねせ方のゆとさうならぬ
さういひしなり

明治元年官軍江戸へ打つしめよむしめかてノフのとも
官軍の到来す氣がた氣じやない西一國藩長玉一勇親の出
迫ひ箱根のお山でトテツルツン市中お見廻り援手のの鐘で誠忠
隊へ一ふ大將軍上野のお山でさドよむげた諸一侯調練
諸歩兵はテツバハでヒヤラヒヒヤラヒ
維新時々の有様見かかし

雀馬樂にあつた
雀の歌か草紙
雀いんちも
雀説

雀の文書の題目もなす雀の中を後方には雀馬樂に
あつた雀の一章もなす其文は

西者の 老鼠美鼠 御愛迷んぶか愛迷んぶ

加愛迷んぶ 法師に申さん 師に申せ

法師に申さん 師に申せ

鼠とてふも何れもさういひせん洋なるわが愛承
二十年お枝の葉の通夜物語ににしは鼠の嫁入と果
報のものもさういふとさうありはかぢぢぢぢぢぢぢ
さういふとさういふとさういふとさういふとさういふ
名とせしやうとせしやうとせしやうとせしやうとせしやう
白鼠の嫁はさういふに思案にはさういふとせしやうと
其名の趣きは白鼠は金の精なるとの支那説も轉じ

たつものを開鏡類に地鏡圖とふ古書と引く昔年の
あつはる及白鼠と名し太平廣記を白鼠金玉の精と
りともありとふんふんを
のり五年は子とふ書と名し
様々の方とふ書と名し
を
此の道はあり白鼠の精と名し
前記、身の衣を喰ひ荒りは糟食の類、衣服を喰はは成るに言
あり、是を越へば衣類を喰ひ、古書に記されは日吉書に
天智天皇大津御時遷し給ひ、年の暮の冬に大和の鹿島の
鼠が近江に移り奉りて、枝原郡に奉りて、天皇が都
を遷し給ひ先づ移りて、鼠が鹿島より大和に移りて、わが
り、昔は鼠の物、物産の類、なり、鼠が生馬の尾に生れ、

を生むと云ふ、昔の書に天智天皇元年の條に、夏四月、鼠馬
の尾に生れ、と云ふ、生れ、と云ふ、又源平盛衰記に、清盛初成の
時、鼠馬の尾に生れ、と云ふ、信や、れぬ、信や、れぬ、信や、れぬ、
あつはる、四月、市村、生れ、と云ふ、鼠の形、形、と云ふ、
し、狂言は、天保三年、八月、に、天が下り、例は、白鼠の、牙に、ぞ、鼠と
あつはる、に、け、の、語、と、刑、に、あ、い、治、り、者、を、脚、を、せ、り、な
る、が、鼠、の、鼠、の、鼠、を、鼠、り、せ、り、と、云、ふ、と、云、ふ、
神代、は、大、皇、帝、が、皇、孫、の、名、を、賜、ふ、に、神、皇、到、ら、ん、の、周、圍、に、大
を、放、つ、て、火、を、皇、帝、の、名、を、賜、ふ、に、神、皇、到、ら、ん、の、周、圍、に、大
と、云、ふ、い、ち、を、脚、に、か、か、り、と、云、ふ、と、云、ふ、と、云、ふ、と、云、ふ、と、云、ふ、
了、と、云、ふ、と、云、ふ、と、云、ふ、と、云、ふ、と、云、ふ、と、云、ふ、と、云、ふ、と、云、ふ、
蓋、は、大、皇、帝、の、皇、孫、の、名、を、賜、ふ、に、神、皇、到、ら、ん、の、周、圍、に、大
毒、に、思、ふ、と、云、ふ、と、云、ふ、と、云、ふ、と、云、ふ、と、云、ふ、と、云、ふ、と、云、ふ、と、云、ふ、

多うの葉をて駕りてありし
辨是しは趣中... 下つ女房はゆき...
て画もあらはに比... 行地ま...
あしめしが... 馬... 木五力のぬ...
電政... 故... 馬... 木五力のぬ...
の... 京... 文... 白...
曲... 何... 前... 手... 加... 隠... 里... 院... 意... 居... 一... 曲... 曲... 昔... 昔... 昔...
... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙...
... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙...
... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙...

鷓林の名跡

東原の大木

和名抄所載
道祖

播磨の道祖祠

別館を鷓林と稱するは慶和城畔の小森林より起る名

東原を稱せの大木は... 杉の根... 大樅... 用幹... 三丈... 高... 丈...
お... 杉... 根... 大樅... 用幹... 三丈... 高... 丈...
和名抄所載

道祖祠 凡俗通云其工は... 子... 如... 志... 持... 故... 其... 子... 獲... 以... 為... 祖

道神 和名抄所載... 唐... 額... 云... 揚... 云... 鶺... 和名抄所載... 加... 美

播磨名所巡見... 道祖祠... 市中... 小祠... 残り... 今... 昔... 社

といふくつて年の末には男女隠形の供物せ向て男女見
 り一万年の時の此拜殿にちまひて祭せ向ちて縁せ引
 た也又言守は所の様を以て後ひし其枝を以て書き書
 撰りず腰をちてあまの祀とんまきとあり

言の始遺如記に
 記の初は奇の中
 縁は蘇由の第の
 通神中縁

言の始遺如記に
 言の初は奇の中
 縁は蘇由の第の
 通神中縁

言の初は奇の中
 縁は蘇由の第の
 通神中縁

松前町の傳説

松前町の傳説
 松前町の傳説
 松前町の傳説

とて何れも持時の子を何れか世話する者が礼に
りしものの中が米を柳にうつりてやせぬ者にして妙なる
を思ひしをそれとて燻の如くもたれども其の内に
ついで其の石積の金の玉あり米を敏にし令て通用し
たるものも持時の米の金の玉あり米を敏にし令て通用し
高に元の通り米の金の玉あり米を敏にし令て通用し
は改めらるるものなりしが持時の米は多辭をせし或は
これを自慢して人々の言をゆゆしけし柳が如し
柳のよき世向の味し安に慢りて米の金の玉を
とせしが更なるものなりしを米の金の玉を
寶の柳のよき世向の味し安に慢りて米の金の玉を
が米の金の玉をちりちりしとて思ふなりしとて

牛善光寺の堂

松前より西の重ツクミナイの上流にトカク沢と云ふ也
山茶を生ず地にはさぶと生ず也水清くすあれ
外には生せず昔のトカクといひしアイノ木に似せしもの
碓ありての葵も此よりか何れからか如きとて植へしもの
今頃の者千軒に布也ゆせとて昔の金持あり
ミリウチ川には妙年ありとの事
明治八年のひは箱館に丸見と云ふ牛屋あり馬牛のまは
肉食のゆへ大なる家あり或は牛を屠りて或は行ふ今
屠せんとせし牛を荒れし網を引きて地をせし中
大駁して荒れ牛を捕てとて手にあまほしに牛箱館の
善光寺の地には牛は堂に居ると云ふ也

安國論に記す
の字

古くは日守也

此の字を人の日守塚のあしと云ふ
花のよしのまゝまほしと云ふ
とある標新の古の標新交と云ふ
日守山人の立正安
の古書七鬼神の押千の美圖丑大方正形而懸方
との文あり當の字の教りじと見ゆ
天正九年七月十日
多聞院日記
書三海山川里寺社田數以下悉注す
越前福井津沼寺新義精野永徳の寺也日本也
開の双丸は乃吉め代のもの

律令格

江戸の所家の
五月

本邦の古書に云々律令格の區別は律とは刑書なり
令とは法度なり格とは臨めのことなるなり
江戸時代所家は元日は見せを前かき
格の三書中にて天正の元日は見せを前かき
墨名くしと書しと然るも水引を結いたる中
下けをせし今は此の事なり
二机の御前奉り
水引を御前始禮請帳と云ふ
帳禮請帳と云ふ
名札の者なり
礼書の者なり
武家御前と云ふ

也きの研につくは...
 形...
 説...
 か...
 研...
 研...



大...
 連...
 三...
 どの...
 の...
 女...
 海...
 海...

引ら場ノ際而セ祝ヒその年ヲ過らし祝ヒ甘ル何カ
竟業トモシマ

腹心ヲ保セヨト云々
未ダ出セヨト云々

右ノ月十廿ノ夜
持チ左ノ子ノ書書セ持テ祈理職社ヲ等各庭ニ出テ云々

左ノ夜
此ノ夜
此ノ夜

此ノ夜
此ノ夜
此ノ夜
此ノ夜
此ノ夜

火攻
火攻
火攻
火攻
火攻

火攻
火攻
火攻
火攻
火攻

火攻
火攻
火攻
火攻
火攻

火攻
火攻
火攻
火攻
火攻

火攻
火攻
火攻
火攻
火攻

火攻
火攻
火攻
火攻
火攻

火攻
火攻
火攻
火攻
火攻

火攻
火攻
火攻
火攻
火攻

火攻
火攻
火攻
火攻
火攻

十寒にむゆ(五) 玉龍ありと活きけり 藤のつよ若きくら
りて大らま連繩のつよ若き藤の始のあめたちを指て也南を
バタバタおして 十丸にむゆのあざけり 狂井餅念うてむ
あつたけしに大まに言ひてあつたけり 玉龍をまのせむ
たしむせむ 玉龍のあざけり 藤のあざけり 藤のあざけり
かすれのあざけり 藤のあざけり 藤のあざけり 藤のあざけり
藤のあざけり 藤のあざけり 藤のあざけり 藤のあざけり

ころころあざけり 藤のあざけり 藤のあざけり 藤のあざけり
のせう△うううううううううううううううううううううう
えんせ木ねい書くころころあざけり 藤のあざけり 藤のあざけり
あつたけり 藤のあざけり 藤のあざけり 藤のあざけり

共古日録 十二 目四十八



天

加



子



子



川
南
北
東
西

子



子



子

子

